

**演 題 名 「ありがとう」のチカラ**

**施 設 名 ひまわり在宅サポートグループ**

**発 表 者 高野 香**

**概 要**

**【はじめに】**

長年、在宅生活を送ってきたが、数年前から原因不明の歩行困難からの寝たきりとなり、高齢の母が在宅で介護していた。民生委員からの介入で障害福祉サービスに繋がり、生活介護（通所）を利用した事により心身状態が向上した症例を報告する。

**【症例紹介】**

Tさん 48歳 女性 障害支援区分5  
既往歴：重度知的障害・甲状腺機能亢進症  
生活歴：在胎8ヶ月で出生し、出生時体重2000gの低体重・低栄養状態。言語面で中心に発達の遅れが見られた。就学時は普通学級であったが、小学5年生の時から特殊学級に移る事になった。中学卒業後、静岡県の縫製工場に集団就職する。10年間勤めるが解雇され、帰郷。以降、在宅生活を20年間送っていた。6～7年前より膝が変形してから歩行困難となり、寝たきりに近い状態になる。室内は這って移動していたが外出は困難で、一日中居室で過ごしていた。発音は不明瞭であるが簡単な会話は可能。民生委員から市の保健師に繋がり、適切な医療を受ける事ができたが、生活基盤が整わないままであった為、相談支援事業等が支援し衛生面の確保や日中活動の場のサービスが必要と判断、平成25年12月よりサービスを利用することになった。

**【治療（ケア）計画】**

本人の希望：できる事は自分で行いたい  
家族の希望：家でお風呂に入れないので、施設で入浴して欲しい

1. 入浴機会の確保・清潔保持の継続
2. 集団生活で他者との交流
3. 活動の中で自分の役割を作る

**【経過】**

利用当初は、長い間、他者と社会交流がなかった為に集団の中になかなか馴染めず、他利用者から離れて座る事が多く、ほとんど全介助が必要な状況だった。今後の支援方法を統一する為に、本人・家族

の要望や自宅での生活状況を含め、カンファレンスを開催した。

1. 全身状態の把握と介助方法の検討  
定期的に身体状況に合わせた介助方法を検討した。
2. 他者とのコミュニケーションのとり方  
活動時は、女性ご利用者と一緒の席にするなど、座る席なども考慮した。
3. 活動の中で本人の役割を明確にする  
本人の役割として毎回、昼休みにタオル干しを行って頂く事にした。
4. できた事に「ありがとう」と全員で声を掛ける  
スタッフ・他ご利用者の協力を得て、「ありがとう」と本人へ伝えるようにした。

**【結果】**

当初はオムツで排泄していたが、自ら尿意、便意を訴えるようになり2人介助でトイレ排泄するようになった。1人で座る不安が強かったが、次第に排泄が終わってからブザーで知らせることができ、衣類の上げ下げも一部介助となり、1人介助が可能となった。タオルを干す仕事を自分の仕事と認識し、タオルを見ると自分から進んで行うようになった。数人で協力しながら行うので、コミュニケーションが必然的に増えた。スタッフ・他利用者から「ありがとう」と言われることで、活動に対して自発的な行動が多くなり、本人のやる気を活動範囲は、さらに広がり創作活動では紙すきグループで材料をちぎる係となり、細かく丁寧な作業を行えるようになった。

**【考察】**

できることが増え「ありがとう」の声掛けに自分の役割の達成感を感じ、意欲的な行動が増えた。自宅で、できる事は自分で行おうとする事が増えた。在宅生活にも変化が現れ、ご本人様ばかりではなくご家族にとっても介護軽減に繋がる良い結果がもたらされた。